

黒目の里をあるく

文化財散策ガイド 3



文化財は、身近なところで、私たちの先祖の生活や知恵を伝えている大切なものです。大切な文化財を未来に伝え残すことを、皆で心掛けるようにしましょう。

片山の歴史

黒目川^{くろめがわ}のひらけた沖積^{ちゅうせき}低地に展開する片山は、古くは片山郷で、「黒目の里^{くろめ 里}」とも呼ばれていました。川と湧水に恵まれた黒目川流域には、旧石器時代から中世にかけて約 60 か所の遺跡があります。

既に3万年～1万5千年前頃の旧石器時代には市場坂遺跡^{ばざかいせき}や池田遺跡^{いけだ いせき}に、ナイフ形石器や細石器などの先人たちの足跡がみられます。嵯峨山遺跡^{さがやまいせき}では、数多くの縄文時代の住居跡と生活用具などが発見されています。古墳時代から奈良・平安へと時代が進むにつれて、黒目川流域全体に居住空間が広がります。そしてムラへと拡大していきました。

天平宝字2年(758)、武蔵国^{てんぴょうほうじ}に新羅郡^{しんらかく}が設置され、片山はその郡下に属します。新羅郡は、延長5年(927)には新座郡^{にいぐら}へと名称が転じていますが、新座市の市名はこの歴史的郡名に由来するものです。

片山郷は、鎌倉時代の弘安2年(1279)に記録された「武蔵国^{むさしこく}国庫五升米納員数注文^{こくご}」によると国衙領^{りやう}として記載されています。やがて中世武士の台頭から、片山郷の出身である片山氏が、鎌倉から南北朝時代にかけて黒目川流域を中心に活躍します。一方、法臺寺を中心とした時宗二祖・他阿真教上人^{ほかあまのこうじょうにん}の活躍もみられ、時宗の人たちによる板石塔婆^{いたび}（板碑）が造立されました。

近世に入ると江戸近郊という政治的位置から旗本の支配下におかれ、黒目川沿いには、栗原・原ヶ谷戸・石神・野寺・下片山・中沢・下中沢・堀内・十二天・辻の10か村が成立しました。村々は木村、桜井、米津^{よねきづ}など「片山七騎^{かたやましち き}」と呼ばれる7人の旗本によって知行^{ちぎよう}され、幕領として明治維新まで続きました。

明治8年(1875)4月に片山10か村は、統合して片山村となり、やがて幾多の変遷を経て昭和30年(1955)3月に大和田町と合併して、新座町の大字の一部、片山となり、さらに昭和45年(1970)11月の市制施行により現在に至っています。



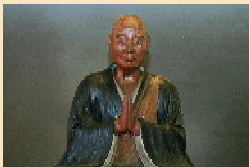
詳しくは市ウェブサイトへ

ほうだいじ いたいしどう ばん ぐん
法台寺板石塔婆群 (県指定文化財)



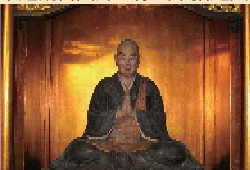
県指定文化財の板石塔婆は全部で11基あり、高さ2mを越すものもあります。造立年代は正和2年(1313)から、至徳元年(1384)。いずれも時宗系の楷書体で、彫りが深く雄大なもので、鎌倉時代の特徴をよく表しています。(一部、歴史民俗資料館で展示)

もくぞう た あ しんきようしやうにんざぞう
木造他阿真教上人坐像 (県指定文化財)



本像は、その特徴的な面貌表現や着衣形式などから、一遍上人の死後に時宗教団を統率し、遊行二世と崇敬された他阿真教(1237～1319)です。本像は作風など技法的にみて、南北朝時代の特色をよく示しています。像高83.7cm・寄木造。

もくぞうかんち こくし ざ ぞう
木造観智国師坐像 (市指定文化財)



本像は、法臺寺で得度し、のちに増上寺の住職になって徳川家康の帰依を受けた普光観智国師(1544～1620)の坐像です。江戸時代初期の肖像彫刻の力作として高く評価されています。像高84.5cm・寄木造。

つきまちじ ぞう ぼさつ
月待地藏菩薩 (市指定文化財)



稲荷会館に安置されている石造の地藏菩薩は、文安3年(1446)に造立されました。光背は円頂形で、像高45cm、幅30cm。銘文から室町時代には月待信仰の対象にされていたことが分かります。この地藏菩薩は、県内最古の石仏です。

はらが やとむらなぬしりやう
原ヶ谷戸村名主資料 (市指定文化財)



本資料は原ヶ谷戸村の名主を務めた、栗山家に伝来したものです。中でも天保7年(1836)の原ヶ谷戸村絵図には黒目川の川筋、道筋、高札場の位置などが記されており、江戸時代後期の村落景観を知ることができます。

けんぼんちやくよくべんざいてんそう
絹本著色弁財天像 (市指定文化財)



妙音沢伝説にまつわる室町時代前期と推定される弁財天の画像で、水辺に突出した岩の上に座って琵琶弹奏する様が描かれています。弁財天はインドの古代神話における河を神格化した女神であり、琵琶弹奏の弁財天像は主に音楽神として信仰を集め、中世以降盛んに製作されました。

もくぞう あ み だ にやうい かんのん せいしりやうぼさつりやうぞう
木造阿弥陀如来及び観音・勢至両菩薩立像 (市指定文化財)



法臺寺の本尊で、三尊像は各像ともに寄木造で、玉眼を嵌入し、肉身部は漆箔、着衣部は黒色泥彩であり、造立時の姿をよくとどめています。室町時代初期の造立と考えられています。中尊の阿弥陀如来像は像高77.5cm、脇侍の観音菩薩像は48.2cm、勢至菩薩像は47.9cmで、三尊一具の中世彫刻として貴重なものとなっています。

くりはらむら なぬしりやう
栗原村名主資料 (市指定文化財)

本資料は栗原村の名主を務めた、原井家に伝来したものです。特に正徳4年(1714)の栗原村検地帳3冊は、片山地区の村落構造と村の歴史を知る基本資料です。

かた やま ぶ し
片山富士 (市指定文化財)

法臺寺境内にある富士塚。「新座七富士」の一つで、富士講の一つである丸吉講の人々によって天保年間に作られました。

えの き ざか
榎木坂

川越街道を野火止台地から下る坂。片山道との交差点に大きな榎木があったためにこの名がつけました。

え ど おう かん どう
江戸往還道

清瀬から江戸に至る道。近隣の人々によって、農作物を江戸に出荷するための道として利用されました。

く よう どう
供養塔

江戸往還道沿いにある石塔。「南・大山、西・ところざわ」と刻まれている道しるべも兼ねた供養塔です。

ひ の はし
樋の橋

黒目川にかかる木橋。江戸時代には伊勢物語の伝説から「火の橋」とも記されました。

あがら めん ざか
油面坂

法臺寺の灯明料として、村人が坂の付近にあった田畑を寄進したことから、油面の坂と呼ばれました。

中 沢 用 水

江戸時代に作られた黒目川からの用水路。石神付近から分水し、いくつかの湧水に合わせて市場坂下に流れています。

ば くらう はし
馬喰橋

黒目川にかかる橋。江戸時代には清戸道の主要な橋であり、人馬の往来が多かったのでこの名がつけられました。

弁 天 池

武野神社の下にある湧水池。元禄年中の新座郡改定図には野寺村の弁天として記されています。

板 紙 工 場 跡

日本で最初にできた板紙(ボール紙)工場の跡。黒目川の水と水車を利用して操業されました。

釈 迦 堂

浄明寺釈迦堂といい、石神の共同墓地になっているところ。堂内には室町時代の鉄仏が納められていました。

たき み
滝見観音堂

滝見観音の伝説があるお堂。本尊は中国から渡来したといわれる、滝を背にする観音像です。



編集・発行 新座市教育委員会歴史民俗資料館
新座市野火止二丁目9番37号 TEL: 048(481)0177
<https://www.city.niiza.lg.jp/site/bunkazai/>

令和6年3月改訂